

【研究ノート】

原爆の被爆継承に関する考察 —青少年ピースボランティアを事例に—

Handing Down Atomic Bomb Survivors' Stories to the Next Generation:
A Case Study of Nagasaki Youth Peace Volunteers

藤本 健太*

Kenta FUJIMOTO

要旨

本稿では、原爆の被爆継承においてこれからどのような方法が必要なのかを考察するために、青少年ピースボランティアを事例に取り上げ、アンケート調査を実施した。このアンケート調査で、青少年ピースボランティアのメンバーは様々な目的を持って参加し、様々な目的から活動を継続していることが明らかとなった。活動に原爆や平和に関することだけを含むのではなく、様々な要素を含め、入口を広くし、原爆や平和に関心がない人も取り入れる方法が必要である。また二次解析を行い、t検定で加入前と現在とで意識の有意差が見られ、相関係数を算出し「活動の満足度」と「被爆継承における貢献度」との関連性が高いことが明らかとなった。

キーワード：原爆、継承、長崎市、青少年ピースボランティア

I はじめに

長崎に原爆が投下されてから2018年で73年が経過した。これまで、被爆者の語り部活動をはじめ、原爆や平和に関する様々な活動が行われ、被爆地長崎から核廃絶に向け、原爆の恐ろしさ、平和の大切さを発信してきたものの、未だ核兵器は存在する。世界で2つしかない被爆地の1つでもあり、核廃絶に向けて原爆の恐ろしさを伝えていくために、これからも被爆の継承が必要である。

被爆の継承といっても継承の方法は、被爆遺構などの「モノからヒトへ」伝える方法、語り部活動などの「ヒトからヒトへ」伝える方法など様々である。丸岡（2014：212）は、「遺構の保存とともにより直接的な教訓を残す具体的方法を検討する必要がある」と述べている。被爆遺構も原爆の恐ろしさを伝え、被爆の継承に必要である。

しかし、被爆遺構のハード面だけでなく、直接的に「ヒトからヒト」へ伝えていくソフト面も必要であると述べている。

しかし、「ヒトからヒト」へ伝える方法は原爆の投下から時間が経過し、環境が変わる中で新しい継承の方法が必要とされる。村上（2018：176）は「児童生徒が第4世代となる中で、平和教育において戦争体験の新たな教育方法が必要である」と述べている。実際に原爆の被爆を経験した被爆者の数は、原爆投下から時間が経過するとともに減少し、いずれは被爆者のいない世界が訪れる。子どもたちも、世代が変わることでこれまで、身近な親や祖父母が被爆者であったのが、身近にも被爆者がいなくなり、原爆への関心が薄れていく。このように環境が変わる中で、これからどのように原爆の被爆を継承していくのか考えていく必要がある。

そこで、本稿では10代から20代の若者を

*長崎国際大学大学院人間社会学研究科観光学専攻修士課程1年

対象に被爆体験の継承と平和意識の高揚を図ることを目的に活動し、長崎市の被爆継承課が運営する青少年ピースボランティアを事例に取り上げて、これからの原爆の被爆継承の方法を考察していく。

II 青少年ピースボランティアの概要

青少年ピースボランティアとは、長崎市の被爆継承課が運営する活動である。15歳（中学卒業）以上30歳未満の青少年が、被爆の実相や戦争について学び、様々な視点から平和について考え、行動することにより被爆体験の継承と平和意識の高揚を図ることを目的として、2002年度から取り組まれている。

2018年3月現在で205名が登録している。男女内訳は、男性48名、女性157名と女性が多く、また所属内訳は、高校生83名、大学生96名、専門学校生3名、社会人23名と大学生の所属が多く、また高校生から社会人まで幅広い人たちが活動している。

表1 2017年度青少年ピースボランティアの主な活動内容

4月	オリエンテーション
5月～8月	青少年ピースフォーラムの準備
8月	青少年ピースフォーラム
11月	長崎県北部バスツアー
12月	派遣研修（鹿児島）
2月	派遣研修（広島）
3月	派遣研修報告会

資料：『平成29年度青少年ピースボランティア報告書』より筆者作成

年間の主な活動内容は表1のとおりである。毎月1回程度、「学習会」が行われている。この学習会の時間では、毎年8月8日と9日の2日間に開催される「青少年ピースフォーラム」に向けての準備や被爆者の講話の聴講、被爆遺構などを巡る

フィールドワーク、学童クラブとの交流を行う。

また、学習会以外の時間でも活動を行う。毎年8月8日と9日の2日間に開催される「青少年ピースフォーラム」は、青少年ピースボランティアの活動の中で一大行事となっている。この「青少年ピースフォーラム」は、全国の自治体が派遣する平和使節団の青少年と、長崎の青少年とが一緒になり、被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的としている。青少年ピースボランティアメンバーがホスト役となり、ゲストの平和使節団の青少年に向けて被爆の実相を学び、平和について考えてもらうための活動を行う。

2日間ともに、AコースとBコースの2コースに分かれて行う。2017年度のAコースでは、「被爆の実相学習」として原爆の熱線、爆風、放射線の3つのエネルギーによる被害について写真スライドでの説明や、原爆によって被爆した被爆者の体験を描いた紙芝居の上演、原爆資料館周辺の狭い範囲を巡る「こじんまりフィールドワーク」を行う。2017年度のBコースでは、フィールドワークを行い平和公園コース、浦上天主堂コース、山王神社コースの3コースに分かれ、被爆遺構などを巡り、原爆や平和について歩いて学ぶ。

1日目の夜は交流会が行われる。この交流会では、「青少年ピースフォーラム」の参加者が集まり、立食形式で行われ、青少年ピースボランティアメンバー、平和使節団の青少年による出し物や歓談で楽しみ、交流する場となっている。

2日目の午前中は、平和使節団の青少年は平和式典への参加、青少年ピースボランティアメンバーは、平和式典参加者に水とおしほりを配るボランティアを行う。平和式典終了後の午後からは、Aコース、Bコースそれぞれ違う会場で意見交換会を行

う。この意見交換会では、青少年ピースボランティアメンバーが平和に関する質問を平和使節団の青少年に投げかけ、考えてもらうものである。

さらに、派遣研修も行われる。この派遣研修は、太平洋戦争に関連する場所を訪れ、その土地でおこった出来事を学び、同世代の若者との意見交換を通じて、今後自分たちにできることを考えることを目的に行われ、青少年ピースボランティアメンバーから数名程が選抜される。年度によって研修先は変わるが、2017年度においては、鹿児島研修、広島研修の2つの研修が行われた。

鹿児島研修では、知覧特攻平和会館と富屋食堂を見学し、犠牲になった特攻隊の悲惨さについて学ぶ。また、鹿児島県立薩南工業高等学校の生徒と「私たちが平和のためにできること」をテーマに意見交換が行われた。

広島研修では、広島平和記念資料館、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の見学、被爆者の講話の聴講をし、広島の実相による被爆の実相について学ぶ。また、広島で平和活動に取り組んでいる中・高校生ピースクラブの青少年と「私たちにできる平和活動」をテーマに意見交換が行われた。研修後は、報告会が行われ、自分たちが研修先で学んできたことを同じ青少年ピースボランティアのメンバーに報告を行っている。

派遣研修の他にも、長崎の原爆以外の太平洋戦争での出来事を学ぶ日帰りのバスツアーも行われる。バスツアーは、太平洋戦争の実相を様々な視点から学習することを目的に行われ、青少年ピースボランティアメンバーから派遣研修よりも多くのメンバーが参加することができる。

バスツアーも年度によって訪問地が変わる。2017年度においては、「長崎県北部バスツアー」として佐世保市を訪れるバスツアーが行われた。このバスツアーでは、浦頭引揚記念平和公園・資料館、佐世保空襲

資料室、無窮洞を訪れた。浦頭引揚記念平和公園・資料館では、太平洋戦争の終結に伴い、海外から日本に引き上げる際の受け入れ場所となっていた浦頭と引揚後の引揚者の悲惨な状況について、佐世保空襲資料室では佐世保空襲を、無窮洞では防空壕で学校生活を送っていた子どもたちの学校生活について学習し、佐世保の太平洋戦争での出来事を学んだ。

青少年ピースボランティアでは、メンバーや活動を運営する長崎市の被爆継承課の職員とでの食事会やクリスマス会の開催など楽しめる行事も行っている。活動の中では、レクリエーションや交流会を取り入れるなど、活動の全てが原爆や平和とは関連したものだけでなく、楽しみの要素、交流の場の要素を含んだ活動となっている。

Ⅲ 青少年ピースボランティア メンバーへの意識調査

1. 青少年ピースボランティアメンバーへのアンケート調査結果

青少年ピースボランティアメンバーの活動から、原爆の被爆の継承の方法について分析するため、青少年ピースボランティアへのアンケート調査を実施した。アンケート調査は、年間の活動の中で一番多くのメンバーが集まると予想された青少年ピースフォーラムが行われた2018年8月9日の青少年ピースフォーラム全行事終了後に、会場である平和会館において実施した。今回のアンケート調査では、32名分の回答用紙を回収し、青少年ピースボランティア全体の16%から有効回答を得た。

また自作の調査項目でアンケート調査を行い、属性の調査項目以外は選択式とした。

回答者の属性は図1のとおりである。女性が多く、年代は10代～20代である。職業では、高校生、大学生、大学院生、専門学生の学生が多く、社会人は3%であった。

経験年数は、1～6年目まで様々である。

アンケートでは青少年ピースボランティアへの加入理由、加入前と加入後の意識、これからも活動を続けていきたいかとその理由について調査した。

はじめに、青少年ピースボランティアへの加入理由の結果は、図2のとおりである。複数選択可とし、加入理由として一番回答率が高かったのは、「原爆や平和について学びたかったから」の23人であった。次に「長崎らしい活動をしたから」の12人、「楽しそうだから」の10人、「仲間を作りたいから」「学生らしいことをしたいから」共に5人、「教職の準備のため」1人と続いた。その他の理由としては、コミュニケーション能力を高めたいから、地元

に恩返しをしたいからなどがあつた。原爆や平和に関連した活動だけあり、加入理由として「原爆や平和について学びたいから」の回答率が一番高い結果となったが、それ以外の「長崎らしい活動をしたから」や「楽しそうだから」「仲間を作りたいから」などの回答にもあり、様々な目的を持ってメンバーが青少年ピースボランティアに加入していることが明らかになった。

また、回答者32名全員がこれからも活動を続けていきたいと回答した。さらに続けていきたい理由についても回答してもらった。複数選択可とし、「原爆や平和について学びたいから」が26人と一番高い回答率

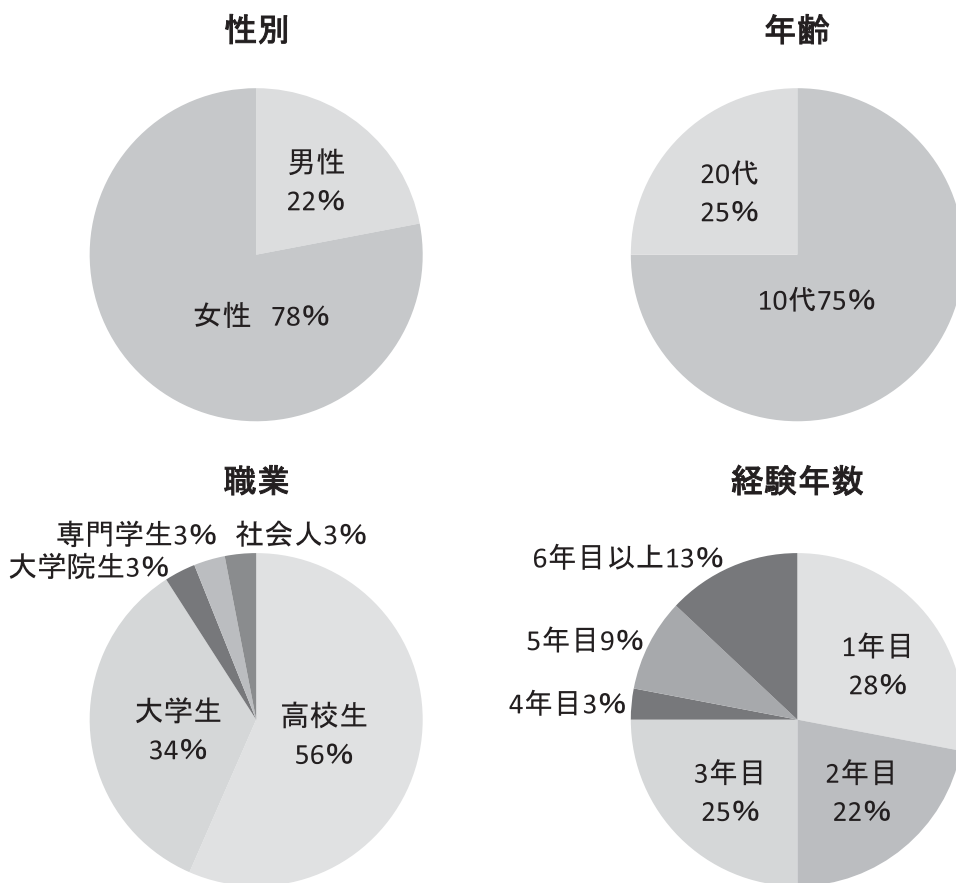


図1 アンケート調査回答者の属性
資料：アンケート調査結果により筆者作成

となった。次に、「楽しいから」の12人、「仲間を作りたいから」10人、「長崎らしい活動をしたいから」8人、「学生らしいことをしたいから」4人、「教職の準備のため」3人と続いた。その他の理由としては、他の戦争での出来事を学びたいから、周りの人への平和の発信をもっと上手になりたいからなどがあった。「原爆や平和について学びたいから」の回答率が一番高い結果となったが、それ以外の「楽しいから」や「仲間を作りたいから」にも回答があり、原爆や平和を学ぶための目的ではなく、様々な目的を持ってメンバーが活動をしているこ

とが明らかとなった。

青少年ピースボランティアメンバーの意識を明らかにするために、「メンバーの原爆の被害に関する知識」「青少年ピースボランティアの活動の意義」「メンバーの伝達力（原爆の恐ろしさを伝える力）」「被爆継承におけるメンバーの貢献度」「青少年ピースボランティア満足度」「被爆継承へのメンバー自身の重要性」の意識を、「とてもある」「ある」「少しある」「ほとんどない」「ない」の5段階で、加入前と加入後で回答してもらった。

まず、「メンバーの原爆に関する知識」の

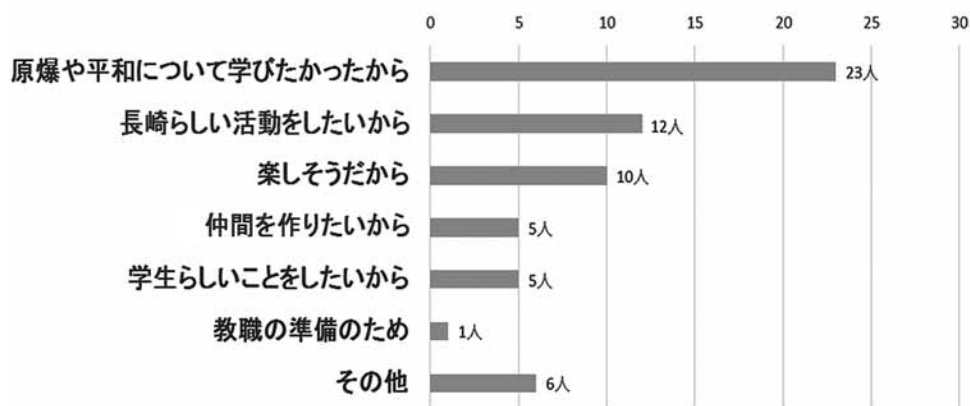


図2 青少年ピースボランティアへの加入理由

資料：アンケート調査結果により筆者作成

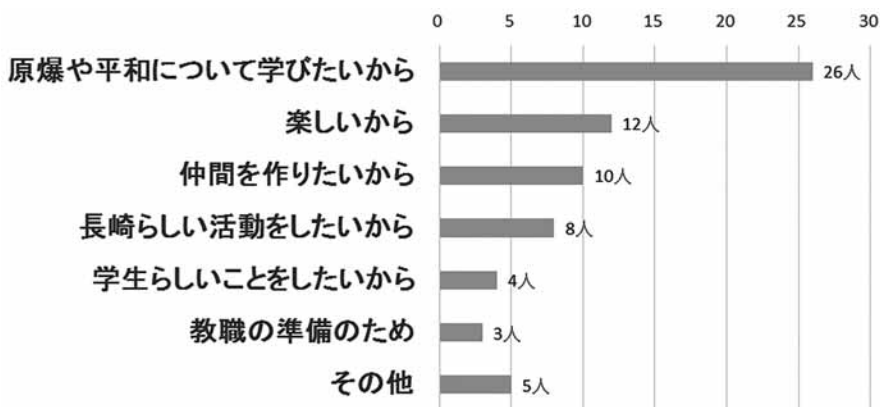


図3 青少年ピースボランティアを続けていきたい理由

資料：アンケート調査により筆者作成

調査結果は、図4のとおりである。加入前では、「少しある」に回答したメンバーが56%と多く、半数以上が加入前から少なからず原爆の被害に関する知識を持っていたことが分かる。「ほとんどない」、「ない」と回答メンバーも3割近くいた。現在では、「ほとんどない」、「ない」に回答したメンバーはおらず、回答したメンバー全員が少なからず原爆の被害に関する知識を持っていることが分かる。さらに、「とてもある」に回答したメンバーは加入前の段階ではいなかったのが、現在では13%のメンバーが

いた。「ある」という回答も加入前では、16%であったのが現在では75%と大幅に割合が高くなっていった。

2つ目に「青少年ピースボランティアの活動の意義」の調査結果は、図5のとおりである。加入前は、「ほとんどない」、「ない」と回答したメンバーもいたが、「とてもある」、「ある」、「少しある」に回答したメンバーは全体の9割近くを占め、加入前の段階からも9割近くのメンバーが活動の意義を感じていたことがわかる。一方、加入後の現在では、「ほとんどない」、「ない」に

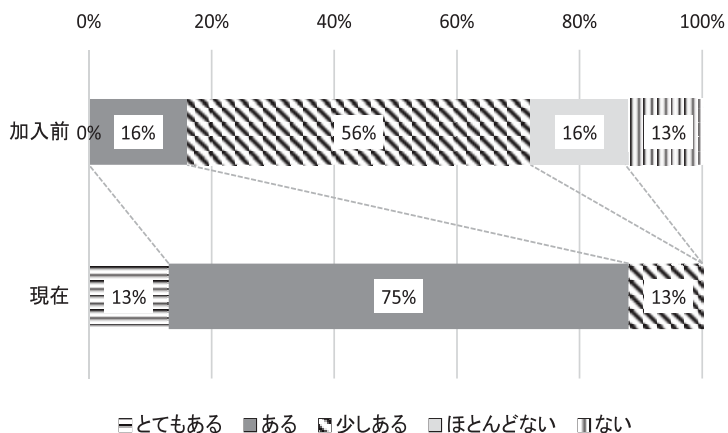


図4 メンバーの原爆に関する知識

資料：アンケート調査により筆者作成

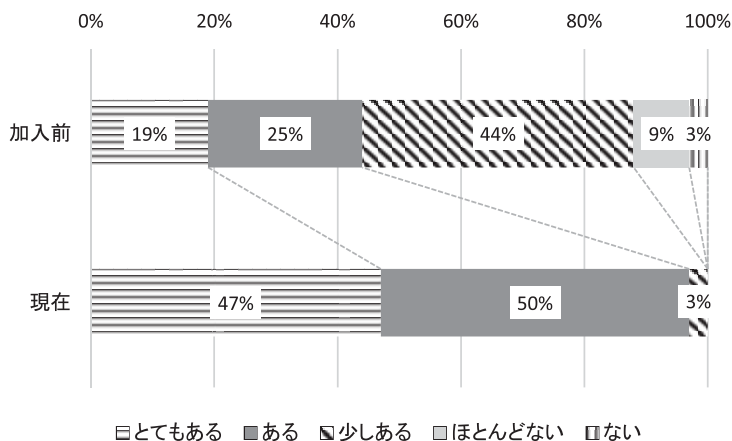


図5 青少年ピースボランティアの活動の意義

資料：アンケート調査により筆者作成

回答したメンバーはおらず、メンバー全員が活動の意義を感じていることが分かる。「とてもある」も、加入前では19%であったのが加入後の現在では47%と増えており、「ある」においても加入前では25%であったのが加入後の現在では半数の50%とこちらも増えている。

3つ目に、「メンバーの伝達力（原爆の恐ろしさを伝える力）」の調査結果は、図6のとおりである。加入前は、「ある」、「少しある」と回答したメンバーは4割で、「ほとんどない」、「ない」と回答したメンバー

が6割近くおり、半数以上が伝達力はほぼなかったといえる。加入後の現在では、「ほとんどない」、「ない」と回答したメンバーはおらず、「とてもある」、「ある」、「少しある」とメンバー全員が少なからず伝達力を持っていることが分かる。

4つ目に、「原爆の被爆継承におけるメンバー自身の貢献度」の調査結果は、図7のとおりである。加入前は、「ほとんどない」、「ない」と回答したメンバーが半数以上を占めており、半数以上のメンバーが青少年ピースボランティアに加入する前は原爆の

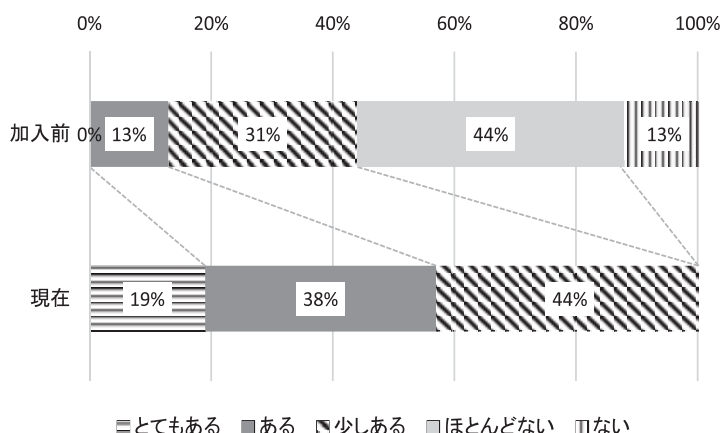


図6 メンバーの伝達力

資料：アンケート調査により筆者作成

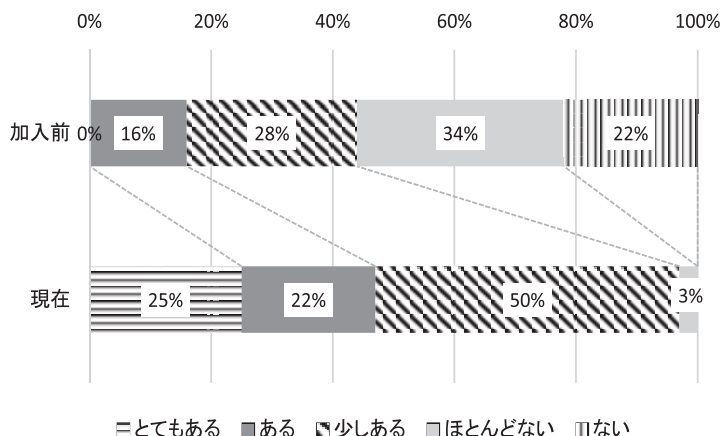


図7 原爆の被爆継承におけるメンバー自身の貢献度

資料：アンケート調査により筆者作成

被爆継承に貢献できていなかった。加入後の現在では、「ほとんどない」、「ない」と回答したメンバーはおらず、メンバー全員が少なからず原爆の被爆継承に貢献できていることが分かった。また、加入前では「とてもある」に回答したメンバーがいなかったのが、現在では25%となっている。「ある」、「少しある」においても加入前と比較して現在の方が増えている。

5つ目に、「メンバーの青少年ピースボランティアの活動に関する満足度」の調査結果は、図8のとおりである。加入前の期待

された満足度は、「ない」、「ほとんどない」と回答したメンバーは共に3%ずついた。加入後の現在では、「ほとんどない」、「ない」と回答したメンバーはおらず、「とてもある」が50%と半数を占めている。

最後に、「原爆の被爆継承へのメンバー自身の重要性」の調査結果は、図9のとおりである。この調査項目では、原爆の被爆継承において回答者が自身の重要性をどのように捉えているかである。加入前では、「ほとんどない」、「ない」と回答したメンバーが1割近くいたが、加入後の現在では「ほ

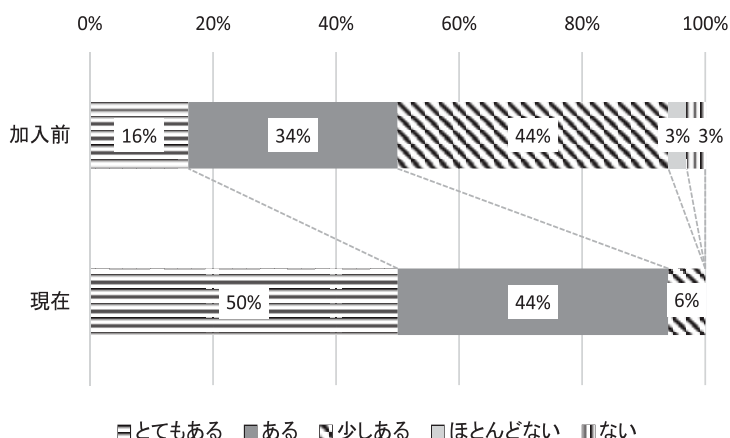


図8 青少年ピースボランティアの活動に関する満足度

資料：アンケート調査により筆者作成

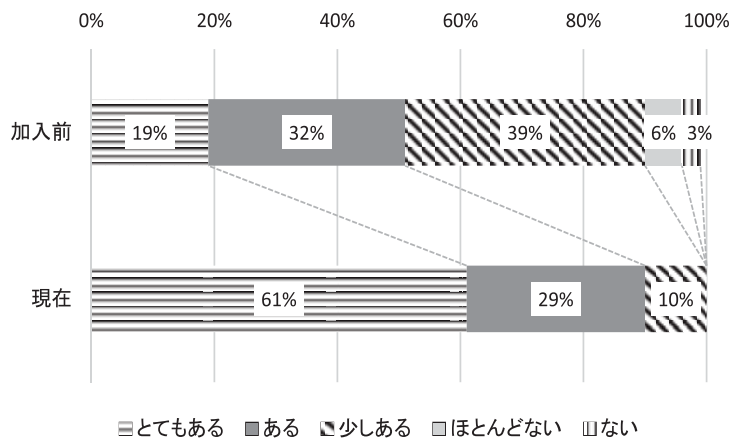


図9 原爆の被爆継承へのメンバー自身の重要性

資料：アンケート調査により筆者作成

とんどない」, 「ない」と回答したメンバーはおらず, 加入後の現在は, メンバー全員が原爆の被爆継承において自身の重要性を感じていることが分かる。また, 加入前は「とてもある」が19%と2割近くであったのが, 加入後の現在では61%と6割にも増えている。

2. 青少年ピースボランティアメンバーへのアンケート調査の二次解析

(1) 加入前と現在との変化

本節では, アンケート調査結果から二次解析を行い, 加入前と現在とで意識の変化があるのか, 活動の満足度を上げるためにどの意識が活動の満足度と関連があるのかを明らかにする。加入前と現在との意識の変化を見るために, t 検定を行った。結果は

表2のとおりである。どの項目も加入前と現在とでは意識の有意差が見られた。 $(p < .001)$ 。特に加入前と現在とで意識の変化が大きかったのは伝達力であった $(t(31) = 7.97, p < .001)$ 。青少年ピースボランティアを通じて, メンバーの意識は伝達力が特に向上したといえる。青少年ピースボランティアメンバーは, 青少年ピースフォーラムで訪れる平和使節団をはじめ団体に対し, 被爆遺構などを説明して案内するガイドを行う。このようなガイドを通じて伝達力が特に向上しているのではないかと考える。

変化の差が小さかったのは活動の満足度であった $(t(31) = 4.76, p < .01)$ 。加入前の期待されていた満足度と実際の活動を通じて得た満足とに差はなく, 期待されていた相応の活動であったといえる。

表2 意識調査の t 検定

	N	M	SD	t
原爆の被害に関する知識 (加入前)	32	2.75	0.88	7.72***
(現在)	32	4.00	0.51	
活動の意義 (加入前)	32	3.47	1.02	6.11***
(現在)	32	4.44	0.56	
伝達力 (加入前)	32	2.44	0.88	7.97***
(現在)	32	3.75	0.76	
被爆の継承における貢献度 (加入前)	32	2.38	1.01	7.69***
(現在)	32	3.69	0.90	
活動の満足度 (加入前)	32	3.56	0.91	4.76***
(現在)	32	4.44	0.62	
被爆継承への重要性 (加入前)	31	3.58	0.99	5.22***
(現在)	31	4.52	0.68	

***: $p < .001$

資料: アンケート調査により筆者作成

表3 満足度と相関係数

	N	満足度 (現在) r
原爆の被害に関する知識 (現在)	32	0.21
活動の意義 (現在)	32	0.45**
伝達力 (現在)	32	0.24
被爆継承における貢献度 (現在)	32	0.55**
被爆継承への重要性 (現在)	31	0.42*

***: $p < .001$ ** : $p < .01$ * : $p < .05$

資料: アンケート調査により筆者作成

(2) 活動の満足度との関連性

どの意識が「活動の満足度」と関連があるのかを明らかにするために、相関係数を算出した。相関係数を算出した結果は表3のとおりである。特に相関係数が高かったのは「被爆継承における貢献度」($r=.55$, $p<.001$)であった。この結果から、特に「活動の満足度」と「被爆継承における貢献度」との関連性が高く、影響が大きいといえる。

また、特に相関係数が低かったのは「原爆の被害に関する知識」($r=.21$, $n.s.$)であり、「活動の満足度」と「原爆の被害に関する知識」の関連性は低く、影響は少ないといえる。

IV おわりに

核兵器廃絶に向けて、長崎から被爆地の1つとしてこれからも被爆の継承が必要とする中で、原爆投下から時間が経過し世代も変わり、親や祖父母など身近にも被爆者がいなくなり、環境も変わり、いかにこれから原爆の被爆の継承をしていくのか考えていく必要がある。そこで本稿では、10代から20代の若者を対象に被爆体験の継承と平和意識の高揚を図ることを目的に、長崎市の被爆継承課が運営する長崎青少年ピースボランティアを事例に取り上げて、これからの原爆の被爆継承の方法を考察するためにアンケート調査を実施した。

この調査結果から、これからの原爆の被爆継承の方法として、活動に様々な要素を持たせ入口を広くし、最終的に原爆や平和への意識を向上させる方法が望ましいといえるだろう。

青少年ピースボランティアのメンバーは、原爆や平和に関連する活動である故に、活動への加入理由として「原爆や平和につい

て学びたいから」という理由が一番割合の高い結果となった。しかし、「長崎らしい活動をしたいから」「楽しそうだから」「仲間を作りたいから」といった要素も加入理由の一つとなっている。

活動を継続していききたい理由も、「原爆や平和について学びたいから」が一番高い割合であったが、それ以外の「楽しいから」や「仲間を作りたいから」という要素も活動を継続していききたい理由となっており、参加目的、継続していききたい目的はひとりひとり様々である。このことから、原爆や平和に関連した活動であれ、青少年ピースボランティアのような原爆や平和だけの要素を取り入れるだけでなく、活動に様々な要素を持たせることで、入口が広くなり、「原爆や平和について学びたい」人だけでなく、それ以外の要素を求める人も取り入れることができる。

様々な要素を求めて青少年ピースボランティアのメンバーは活動に参加し、活動を続けている。ひとりひとり様々な目的を持っているにせよ、アンケート調査の結果、加入前と加入後の現在の意識には有意な変化が見られ、原爆に対する意識は高くなっている。

参考文献

- 丸岡 泰 (2014) : 「自然災害遺構は防災の教訓を伝えるか—コスタリカ・カルタゴの事例から—」『第29回日本観光研究学会全国大会学術論文集』, 209-212頁。
- 村上登文 (2018) : 「戦争体験継承に対する当事者意識を育てる教育の考察」『京都教育大学実践研究紀要』18号, 173-176頁。
- 長崎市被爆継承課 (2018) : 『平成29年度青少年ピースフォーラム報告書』長崎市。
- 長崎市被爆継承課 (2018) : 『平成29年度青少年ピースボランティア報告書』長崎市。